

---

# 紅菖蒲

語音ヨミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅菖蒲

### 【Nコード】

N1622S

### 【作者名】

語音ヨミ

### 【あらすじ】

様々な国の文化が折衷して栄える街、白百合。一人の少女が刀一つで翔ていく。

少女の腰の、紅い刀は何を映す。

企画【candy store】参加作品です。サブタイトル横の【】内にお題を書いています。

## 白百合の街【アイスクリーム】

白百合の街は、いつも通りの賑わいを見せていた。様々な服装の人物が往来を行き交い、それに呼応するように店が忙しく動いている。この国で最も栄える街、それこそがここ、白百合なのだ。

一方に目を通すと、簪<sup>かんざし</sup>やヘッドドレス、ネックレスといった装飾品の店が並び、他方に目を通すと、茶屋やカフェ、さらには定食屋やビストロ、奥には料亭や高級レストランといった様々な料理店がならぶ。辺りの人間も、浴衣をきてカフェでコーヒーをすすめる女性もいれば、料亭の前で馬車を止め、執事を連れて入っていく正装をした男もいる。

そのような街並みのなか、一人の少女が喫茶店でアイスクリームを食べていた。

少女の名は沙耶<sup>さや</sup>という。黒く長い髪に切れ長の目、色を抑えた浴衣を着て素足に質の良い雪駄をはいており、浴衣の下にはいたスラックスが裾から見えている。

それだけなら美少女がアイスクリームを食べているで済んでいるのだが、彼女の存在を際立たせているものがあつた。

傍らの刀である。長さは二尺五寸ほど、鞘には菖蒲をあしらった箔がおされ、鍔は桔梗の意匠がほどこされている。素人の持つ懐剣にしては長すぎるしなにより目立つ。

装飾の派手さも相まって二十歳に届かない少女が持つていれば、強盗に狙われるような代物だろう。刀は売れば金になる。

にもかかわらず、まるで周囲を意に介していないかのように黙々とアイスを口に運んでいた。沙耶の色の薄い瞳は変わらずに鈍い光を留めている。

「おかわり」

不意に一言、皿の上のアイスは全て腹の中に消えていた。

ウェイトレスは厨房に入っていく。数分して戻ってきたウェイト

レスの手にはアイスクリームが乗った皿があった。スプーンですくって口にする。切れ長の目がわずかに広がり、瞳の鈍い光が少しだけはっきり色をなした。

にわかに外が騒がしくなる。沙耶は気にせずに食べ進めていたが、突然入り口からドサツと物のぶつかる音が響いた。続けて二人の男の声が聞こえる

「や、止めてください、お願いですから！」

「うるせえ！どうしてくれんだよこの服、高かったんだぞ！」

「そ、そんなこと言われても……」

会話のようなものが始まったかと思うと殴る音や壁にぶつかる音が響いてきた。

「ハア、なんてベタな……」

沙耶はため息をつく、勘定をその場に置き、皿を持って立ち上がった。ウェイトレスが慌てて手に取り、数え始める。

「あの、お客様、お釣りを……」

「いいわよ、どうせアイスの代金だけじゃすまないし」  
そう言うと、出入り口に向かって歩き出す。

扉を開けると、声の主らしい二人の男とそれを取り巻いている野次馬がいた。二人の男は同じくらいの歳のようだ。一人は痩せた身体、もう一人は筋肉質な体つきの大男だった。

見たところ、痩せた男が筋肉質な男に因縁をつけられているようだが、沙耶にとってそれはどうでもいいことだ。

「店の前で騒がないで。うるさくてしょうがない」

いきなり声をかけられた男は初めギョツとしたが、相手が年端もいかない少女とわかると顔をにやけさせた。刀を持っているとはいえ、相手は女、ましてや少女なのだ。腕で負けるわけがない。

野次馬もそのように見たのか、ざわめきだす。男も余裕ぶつた言葉を発している。男はさらに言葉を継ごうとした。

突如、男の味覚は甘いものをとらえ、直後、男の意識はかき消えた。顔面に皿を叩きつけられ、その上から殴られたのだ。

野次馬は盛大に吹っ飛んだ男を見て騒ぎ出す。沙耶は野次馬を押し退け、人の輪の外に出た。口々に噂をする群衆を尻目に、腰に刀を挿した少女は街並みにきえていった。

二十畳ほどの部屋、一人の少女が窓辺に佇んでいた。部屋を真ん中で割って入り口側にはソファアが二つと低めのテーブル、奥側には机と椅子がある。

さしずめ何かの事務所のようであり、それに必要なものは一通り揃っているようだったが、少女はそれでもこの空間にぽっかり開いた穴を感じているようだった。というのも今、この事務所には、主がないからだ。

椅子よりも、机よりも、客への応対用のソファアよりもあるべきものがない、少女はそれに虚無感を感じていた。

もつとも所長がここを空けるのは珍しくなく、むしろ昼間の時間帯はいない時間のほうが長いだろう。そのお陰で少女は急に客への応対を強いられるわけだが。

気まぐれに街を徘徊し、気まぐれに戻ってくる。そしてほとんど腰を落着けることなくまた街を徘徊しだす。まるで猫のようだと少女は金髪をかきあげて苦笑した。

ふと、窓の外に目をやる。夕陽が外の街並みを赤く照らしている。彼女はそれを見て、お湯を沸かし始めた。

慣れた手つきで茶の準備を進めていく。やがて、事務所に近づく足音が響いてきた。

所長が帰ってきたようだ。いつもこの時間には事務所に帰ってくる。少女は茶を準備する手を早める。

「ただいま」

扉が開き、一人の少女が顔を出した。

浴衣を着て素足に雪駄を履き、裾からストラップが見え隠れしている。そして、腰には一本の刀。彼女の姿を認めて少女は微笑んだ。「お帰りなさい、沙耶さん」

## 追想と依頼【キャンディ】（前書き）

参加者の皆さん、遅刻してすみませんでした m ( \_ \_ ) m

## 追想と依頼【キャンディ】

事務所の椅子に座り、机に突っ伏して沙耶は寝ていた。一日中歩き回っていたとはいえ、なにを疲れたのかと傍らで一人の少女が笑う。

少女に名前はない、故に名を呼ばれない。少女はそれを当然としている。解りにくいからと沙耶が呼ぶ「綾<sup>あや</sup>」も、彼女は本当の名前と認識していなかった。

それはこれから変わることはなく、自分には名はいらない。少女はそう考えている。今、こうして暮らしていけるだけで、他になにも望む必要はないから、として。

少女と沙耶が初めて逢ったとき、少女は檻の中にいた。そして、少女が初めてとらえた沙耶の姿は、檻の向こうで男と話している姿だった。

勿論その時は少女は沙耶の名など知らず、ただの傍観者のように二枚の小判を渡す姿を見ていただけ、最早自分の運命すら諦めていた。

鍵を開けて入ってくる手、それに人形のように、無抵抗に引つ張られ、檻の外に出る。全てを捨て去ったように、いや、確かに彼女は捨て去ろうとしていた。逃げることはおろか、これから自分の身体をどうされるのか、それすらも少女の思考から消え去っていた。

だから、彼女が少しだけ驚くのに時間はかからなかった。突然沙耶に背負われたのだ。少女は自分を背負う華奢な背中感触、静かに感じる体温に戸惑いを持った。自分が感じたことのないものばかりだったからだ。

背中少女が硬くなるのを感じたのだろう、苦笑したように声を漏らし、子供をあやすように少女を揺すりあげた。それを受け、少女は身体を沙耶の背中に預けることにした。

華奢なはずの沙耶の背中は、少女にはとても頼れるものに感じた。

折れそうなほど細いはずの、それでいて広く見えるそれに安堵したのだろうか、少女は沙耶の背中で静かに眠りについた。

「まったく、こんなところでしょうがないわね、綾」

言葉を発し、沙耶は膝の上に寝る少女の髪を撫で上げた。突然背中に抱きつかれて目が覚め、抱きついた張本人は即座に眠りについていたのだ。彼女には、今更ながら、呼び名を間違えた気がしていた。

綾というのは沙耶のかつての想い人、景虎の姉の名前である。景虎から聞いた話では信心深い高潔な人物であり、少なくとも抱きついたまま寝てしまうような人物を想像したことはなかった。もっとも彼女はそれを本当の名前と認識していないのだが。

それでも目の前のこの少女が彼女にとって大きな人物になっていることに替わりはない。肩の辺りで切った金髪をそつと撫でてやる。その表情は、まるで妹を慈しむ姉のようだった。

不意に、足音が響く。それは事務所に来客が来たことを告げていた。

「綾、起きなさい」

少女の頬をペシペシと叩いて起こす。眠たそうに呻きながら少女は目を開く。

「ふえ？沙耶さん……どうかしたんですかあ？」

舌つ足らずに喋る。これでは客が入ってくるまでに覚醒しきらないことは容易に想像できる。

普段は少女にやらせているのだが、今回は沙耶が自分で茶を煎れることにした。覚醒しきらないうちに茶なんて注がせたら危なっかしくてしたかたないからだ。

茶の準備が完了するのと客が扉を開けて入ってくるのはほぼ同時だった。

「あら？貴方さっき……」



来た客は先ほど沙耶が殴り飛ばした男に絡まれていた青年だった。青年は苦笑しながら頭を搔いていう。

「覚えていましたか、先ほどはありがとうございました」

「いえ、あれは自分が鬱陶しかっただけだし、お礼を言われるようなことじゃないから、それよりお茶をどうぞ」

「そうですか、では、頂きます」

やり取りの後、茶をすすする音が響く。沈黙の後、口を開いたのは沙耶だった。

「ところで、どんな用事で来たんですか？」

至極当然の疑問である。それに対し、青年は真顔になって応える。  
「ああ、そうでしたね。沙耶さん、貴女にこそ頼みたいことなんですよ。……非公式の警察を名乗り、正宗作無銘 通称、紅菖蒲<sup>べにあやめ</sup>を持つ貴女にこそね」

青年の言葉を耳にした沙耶の表情が微かに引き締まる。

「非公式の警官云々は隠してないし、気にしないけど、刀のことを知ってるのは見過ごせない。これは滅多なことでは抜かないし、人に見せたこともない。」

「存じています」

感情のない声で返す。

「ならば何故、私がこれを持っていると知っているの。これを隠す意味はたった今なくなっただね 返答次第では、斬る」

何時の間にか、刀は鞘から抜かれ、その切っ先は青年の首筋に触れていた。その菖蒲の葉のような細長い刀身は、透き通った紅色をしていた。

それに気付いた青年の顔がはっと蒼白になる。だが、冷や汗を掻きながらだが、すぐに元の落ち着いた表情に戻っていった。

「はは、本当に刀身が紅いんですね。なるほど、確かに悪目立ちするし、滅多なことで抜ける刀ではないで」

「質問に答えなさい」

沙耶は刀を更に首に強く押し当てたが、内心ここまで早く落ち着

きを取り戻した男に舌を巻いていた。こいつは本当にチンピラに絡まれていた男か、と。

「刀のことは、ひとまず置いときましょう。お嬢さんが怯えていますよ?」

青年の言葉にはつと振り向く。そこには、目を覚ましきった少女が青年のいう通り、怯えた顔でこつちを見ていた。

沙耶は軽く舌打ちをして、刀を鞘に収めた。

「何故、知っているのかはもういいわ。用件を言ってちょうだい」

青年が自分の刀を知っているわけを、もう気にしないことにして肝心なところを訊く。すると、青年は耳を貸せとでも言うように手招きした。躊躇わずに青年の口に耳を近付ける。彼の言葉を聞き、少女の眉がピクリと動いた。

「そういうこと、なら」

言葉を切り、棚からキャンディを取りだし、青年に投げ渡した。何気なく彼は手で飴玉を受ける。刹那、青年の視界に紅い光が映った。「その仕事、受けてあげるわ」

刀を収めたながら沙耶は言う。チン、と音が鳴り響き、同時に青年は肝を冷すことになった。

手で受けたキャンディが真つ二つに割れていたのに、気付いたからだ。

## 靈器「クッキー」

白百合の街の一角にある事務所、普段二人の少女によって柔らかい空気が漂うそこには今現在、殺伐とした空気が漂っていた。なんのことはない、事務所の主である沙耶が客の青年に投げ渡したキャンディを真つ二つに斬った結果である。

「……いったい沙耶さんになにを話したんですか、貴方は」

わずかに目に怯えを残しながらも少女は口を開いた。青年は無言のまま汗をぬぐう。目の前でキャンディが真つ二つになったという事実、流石の彼も肝を冷やしていた。それを無視と取った少女は更に彼を問いただす。

「答えて下さい、沙耶さんになにを話したんですか」

青年は少女を一瞥し、やがて、ポツリと言った。

「いくら因縁深いとはいえ、まさかあれほど怒るなんてねえ、予想外でしたよ」

因縁、その言葉による刹那の沈黙、それに連なる空白、破ったのは少女の声だった。

「え？因縁ってどういう意味ですか！あの人、なににどう関わって」

少女の言葉はそこで途切れた。青年の指が、少女の唇を塞いでいた。「……落ち着きましょう、貴女が彼女をどう見ているかは知りませんが、私が知っていることを話します」

青年はなにかを考えるかのように口元に手を当て、やがて口を開いて淡々と語り出した。

「彼女が何者かを説明するには、まずは靈器というものから説明しなければなりませんね」

「レイキ……ですか？」

「ええ」

少女の言葉に青年は頷き、真つ二つになったキャンディを弄りな

がら語り出した。

### 数刻後

日が沈み、空気までが薄暗く染まった頃、白百合郊外のある屋敷前に一人の少女が姿を現した。

浴衣の下にスラックスをはき、腰には刀をさしている。無論、沙耶である。

「靈器の争奪、か」

彼女はそう呟くと、目の前の格子状の門を塞ぐ鍵に手を触れた。触れる感触から、鍵がかなり頑丈で、壊すことは至難の技だと悟り

口元に笑みを湛える。そして腰の刀に手をかけ、鞘から紅い刀身を引き抜く。そして足を軽く前後に開き、膝を折り、刀を身体の前横に構える。

瞬間、刀身は振り抜かれ、薄闇に紅い軌跡を残して門を両断する。更に門に強烈な蹴りが入り、派手な音をたてて大きく開く。

当然のように音を音を聞き付け、屋敷に雇われていたのであろう人間が銃を持って門に集合した。それを見て少女はクスクスと笑う。

「七人か、以外と少ないお出迎えね」

「そいつはな嬢ちゃん……」

うちの一人が銃を構え、それに呼応して他の全員も同様に構える。「こいつを喰らってから言いな！」

最初に構えた男が引き金を引き、他の人間も一斉に発砲する。沙耶は咄嗟に横に跳ね、銃弾を回避する。そのまま庭の樹の裏に回り、通り抜けざまに集団の側に斬り倒した。

集団は広がった枝の下敷きになる。致命傷とはならずとも、足止めには十分だろう。そう判断し、沙耶は屋敷の扉に向かって駆け出した。

先程の門のように扉を両断し、そのまま蹴り飛ばして突入する。当然のように「お出迎え」は現れる。

「ざっと十人……これなら突破出来るわね」

集団の真っ只中に躍り出でて、刀を振るう。内三人が切っ先に触れ、一人は顔を斜めに、もう一人は胴を、斬られて痛みに怯み、三人目は足を斬られて崩れ落ちる。すかさず顔を斬られた男の頭を峰打ちで碎き、胴を斬られた男を殴り飛ばし、足を斬られた男は蹴りをまともに喰らい、意識を飛ばされた。

残りの七人が一斉に銃を構える。

「クソッ！蜂の巣にしてやらあ！」

庭の時のように一斉に発砲される。

「止めなさいよ」

その内の一人の背後に沙耶が回り込み、背中から刀を突き刺す。刀を思い切り振り払い、男を残りの六人に放り投げる。二人がバランスを崩し、床に倒れ込む。沙耶は追い討ちをかけ、二人を斬ると即座に残りの四人に向かい、次々と斬り臥せた。

「弾の無駄だから」

そう吐き捨てると床に転がる集団を振り返ることもせず、屋敷の奥に向かって先を急いだ。

「そんなものが、実在するんですか……」

少女の言葉に青年は答えない。ただ、少女の顔を見つめるだけだ。

「沙耶さん、大丈夫かな」

つい、独り言を呟き、それ以後黙り込んでしまった。

「そんな顔しないで下さいよ、まるで私が悪者みたいじゃないですか」

青年はおどけたように言うが、それは少女の沈んだ心を癒すことはなかった。

「そんなこと言われても……貴方凄く胡散臭いんですもん」

青年の方を向くこともなく答える。

それ以後、少女は完全に沈黙してしまい、青年がいくら話しかけても答えることはなかった。

……沈黙そのもの、そう形容出来る空気がこの事

務所に漂っている。いつしか雨が降り始め、雨音が更に事務所の中の静けさを引き立てる。

少女と青年の間にはある種の気まずさが流れていた。

（やれやれ、これじゃあここにいつらいじゃないですか）その心模様を表すかのように軽く身じろぎをするが、その程度で気まずさが消えるわけもなく、青年は漂う沈黙に耐えていた。同時に、沙耶が帰ってこない限り、自分はここで耐え続けなければならないことを、確信していた。

（出来るだけ早く戻ってきてくださいよ沙耶さん）

結局、彼が沈黙から解放されたのは、それから一時間もたつたことだった。

「ただいま」

入り口からその声が響いた時、青年はやつと肩の力を抜いた。

「沙耶さん！」

少女は彼女の名を呼ぶと入り口に駆け出し、おもいきり抱きついた。

「お帰りなさい」

涙をこらえ、帰ってきた人を迎える言葉を言う。それでも堪えきれない涙が着物の胸元を濡らす。冷たい雨の水に暖かいものが混ざるのを感じ、そつと沙耶は目の前の少女の頭を撫でた。

「心配かけたわね、綾」

謝罪の言葉を口にする、青年に向き直り、背負ったものを渡した。「なるほど、これがそうですか……かなり強力なものそうですね」「ええ、槍弾正『保科正俊』。下手をすれば神器になってもおかしくない代物よ」

そこまで言つて、口調を冷たく変える。

「受け取ったならさつさと帰りなさい、靈器を欲しがらつてろくなのいないんだから」

「言われなくてもそのつもりですよ、ではまた縁があれば」

飄々とした態度で、青年は去っていった。あとには沙耶と少女が残される。

「沙耶さん……」

先程のやり取りをみて心配したのか、少女が沙耶に手を重ねる。それにふつと微笑み、沙耶は椅子に座り、そして言葉を口にした。

「心配いらなから。ところでクッキー買ってきたんだけど、食べる？」

好物の名を出され、少女の顔から暗い色が薄れ、そしてただ一言答える。

「はい！」

## 風邪【プリン】

「不覚だった……」

とある事務所、一人の少女の声が漏れた。

「濡れたまま着替えないからですよ、いいから寝て下さい」

「そんなこと言って、抱きついて着替えさせなかったのはどこの誰よ」

軽く咳払いをしてもう一人の少女が手拭いを絞る。肩で切った短い金髪を揺らしながら言葉をついだ。

「どこかで雨宿りするなり、傘を買うなり、方法はあったでしょ」

「帰ってきたとたんに抱きついてくるようなあなたを待たせるのはかわいそうだし、あんな状況で財布なんて持っていないから」

そう言われて少女は口をつぐんでしまった。論破されて言い返せないのだ。

束の間の沈黙が流れ、絞る手拭いから水が滴り落ちる音だけが響く。やがて、口を開いたのは布団にくるまっている黒髪の少女だった。

「綾、お酒持ってきてくれない？」

「だめです」

黒髪の少女は飲み物の注文をつけたが、あっさりはねられる。

「寝酒くらいいいでしょ。それに買ったの私なんだし」

頬を膨らませて棘を刺すように言うが、このやり取りは少女にとっては慣れたものだった。

「そんなこと言って、寝酒って言える量で済んだことないでしょ、沙耶さんはただでさえ凄く飲みますから」

ものの一刻で一升瓶を三本空にして酔いつぶれる様子のなかった沙耶の姿を思い出して少女は身震いした。ただでさえ具合の悪い沙耶に、あの量を飲ませたらかえって体調が悪化してしまいそうに思えた。



「いいじゃない、風邪には温めたブランデーがいいっていうし、寝酒飲んでぐっすり眠ったほうが治りも早いと思うから」

「あなたが飲むのは焼酎ですし、沙耶さんの寝酒はお猪口に一杯じやなくて盃になみなみと注いで一気飲みするじゃないですか。とにかくだめです、飲ませませんからね」

「いいから持つてきてよ、飲まなきゃ眠れない」

これ以上言葉を返しても延々と口論になるだけ、そう判断して少女は無言のまま行動にでた。

絞った手拭いを入れた桶を布団の上に置き沙耶の上に馬乗りになり、肩に手を当てる。

「なに？……つてきや」

漏れた言葉を見殺して手に力を入れ、体重をかけて押し倒した。額に手拭いを乗せ、耳元で囁く。

「後でプリン買ってきてあげますから」

それを聞くと急に黙り込み、微かに笑って目を閉じた。

とはいえ、なかなか眠れないらしい。目がパチパチと開き、布団がもそもぞ動く。やはり少しは飲ませたほうがよかったかなと、少女の頭をよぎるが、すぐさま頭をふってその考えを追い出した。

「じゃ、プリン買ってきますね。お酒飲んじやだめですからね」

パタン、という音が響き、沙耶の中からなにかが抜け落ちた。元々孤独を嫌う性の彼女は自分一人で事務所にいることに違和感を覚えていた。少女を買った理由ももとはといえば、その性に基づくものだった。

だから、孤独を嫌う自分を自嘲した。

（これじゃ、綾に言えた義理がないじゃない）

頬に伝う雫を拭い、目を閉じてある人を想う。反故になったとはいえ、かつて縁談があがったこともある、その人を。

（景虎様……）

何時しか、沙耶の意識は白昼夢に溶け始めていた。

一人の少女が弓に矢をつがえ、狙いをつける。手を放したと同時に弦が震え、矢は吸い込まれるように凶星を突いた。今日はここで十分だろう、そう判断して弓矢を片付け始めたところに足音を捉えた。特に気にすることもなく、片付けを進めていく。

「相変わらず、精が出るな」

「……兄上、また皮肉ですか」

また皮肉を言いに来たのか、そう思ってうんざりしていた少女だが、兄から出た言葉は少女にとって意外なものだった。

「いいや、純粹な賛辞だ　ところで絶<sup>たえ</sup>、お前も十七歳、そろそろどこかに嫁いでもいい頃だ」

「と、いいますと？私に人の妻になれと？生憎ですが、私はそんな普通の女のような退屈な暮らしは御免です」

これは以前から少女が言い続けてきたことである。何時もならこれで兄は引き下がるのだが、今回は違っていた。

「まあ、まずは話を聞け。お前を誰に嫁がせると思っている？」

少女は首を傾げる。兄がここまで男を薦めるなど、珍しいからだ。当の兄は少女の反応を見て満足そうに頷いた。

「最後の守護代の長尾景虎殿だよ、名前は聞いたことがあるう？」

「となると、兄上が援軍を出したあの……？なるほど、それで、景虎殿はどちらに？」

そう言いつつ少女はおもむろに歩き出した。兄が自分に薦めるほどの男、その顔を見るために。

ガチャリ、その音で沙耶は白昼夢から引き戻された。プリンを買いに行った少女が買い物を終えて帰って来た。

「ただいま、起きてちゃダメじゃないですか」

たしなめるように言って、枕元にプリンを置く。

沙耶の手がプリンを口に運ぶ。スプーンに掬われ、少しずつ消えていく。

「ありがとう」

素直な感謝を伝え、再び布団にくるまった。

少女が微笑み、立ち上がって離れようとしたとき、

「きゃ」

沙耶に手を握られ、布団の中に引きずり込まれた。そのまま背中から抱き締められる。

「沙耶さん、離して下さい……で、このまま寝ないでください！」

自分を抱き締めたまま寝息をたて始めた沙耶を振りほどこうとものがくが、沙耶が起きる気配もなく、少女は布団から出れなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1622s/>

---

紅菖蒲

2011年6月18日18時40分発行